

政治詩人の結末

—遠地輝武をめぐる対話

西 杉 夫

A 遠地輝武は一九六七年に亡くなった。この年に出た最後の詩集『千光前25番地』の最後の詩が「けぶる」なんだね。これは遠地の詩のなかでわりとよくとりあげられるもので、亡くなった翌年の『民主文学』12月号には、この詩にふれた奈良憲の創作「けぶる」がのっているんだけど、読んだかな？

B ああ読んだことがある。創作欄ののっていたから、作者は創作のつもりだったんだろ。うが、文学的には論じる意味のあるような代物じゃなかったようにおぼえている。

A それはそうだが、ある種の人たちの遠地

の詩についての見方はよく出ているとおもうんで、この詩あたりを話の糸口にしたいんだ。まあ多少は知られているとはいっても、まず引用した方がいいだろうな。そう長くもないから、全部をよんでみよう。

身体髪膚 コレヲ

父母ニウケ 病苦憂転こんにちにいたる

そんなこんにちに到れば 回想ばかりが日

程だが 誇りはやはり共産党員として生

きてきた白責だろう

わたしは一個の共産党員として 妥協もせ

ず

愛嬌もふりまかず わがままに

いつも愚かに生き抜いてきた

わたしはまた共産党員として死にたいのでいろいろの重荷にも愚直にたえた
どんなに党が重苦しくても
党を愛し 党を信じてきたつもりだが
ときには人間が党の顔して旗をふったり
安手の教条坊主が説教などふりまくと
どく腹をたてたりしたものだ
だが いまわたしの状況はちがっている。
わたしはもう老人であり、とりわけながい
病患に潰えて

党とのつながりも 愚痴と回想の孤立があるだけだ

あと のこりの生涯もあまりながくはないだろう

こんなわたしに このうえ何かを望むならさらに精一杯の愚直に生きて筋道を貫くだけだ

おもい出す ——昔 わたしはまいにち浅間の噴煙をながめて おもい多くくらしただいがある

春がきて黒い土塊が顔をだし

草木が新芽を光らしたり

人間が田くろに出て鋤耨をうちはじめると噴煙の浅間はいよいよ雄大に 悠々とけぶったものだ

それは原初の日の再現であり
自然と人間とのかぎりない交歓と抱擁でもあった。

いいにしろ悪いにしろ噴煙は浅間のいのちいいにしろ悪いにしろ党はわたしのいのちふと わたしは(ああは悠々けぶる)となげいた

ある浅間の画家の悔恨などおもいだしながら

ら

ああは悠々けぶるけれども

やはりわたしは一個の共産党員として死にたいので

もうしばらくのいのちを悠々けぶりぬくつもりだ

けぶる

けぶる 壮厳

という詩なんだね。

B 遠地の晩年にはよく出入りしていたんだけど、生前に奈良憲について遠地から書いたことは一度もなかった。京都で労働運動をやった人で、プロレタリア文学時代に遠地と知りあったようにかいていたね。奈良のは創作というより、遠地をからませながら自分のあれこれをかきつらねた感想文だったな。遠

地にかんする部分にはひどいところがあるんで、野口清子が怒って遠地輝武研究会の『千光前通信』2号(六九年五月)に批判をしている。野口の筋がとおった、もつとも意見だとおもったね。

A 奈良によるとこの詩は「ひそやかな、しかし格調高い」ものであり、教条主義者たちを「心からにくみ、それが進める闘いをあやぶみ、さげすみ、しかも党を熱愛し、党をなれることのできなかつたその愚直、その頑固さを、みずからの死をもつてうたいあげた」ものだそうだ。その先がまたふるっているんだよ、こういつているんだ。「この四十年、凡作、駄作をかきつづけてきた遠地も、死のぞみ、死をもつて、ついにようやくただ一つの傑作詩を書いたのだ」。遠地もこれをきいたら失笑するだろう。

B まあ事実ということからいっても、うそが多いということになるな。遠地が共産党を「熱愛」していたかどうかは、少なくとも晩年についてはそうでなかつたことを、ぼくら遠地のところに入りましたものは知っているしね。

遠地がすぐれた詩をかいたかどうかは別として、これ一作のみで他はすべて凡作という

のもひどすぎるね。題材はちがうけど、こういったような詩を遠地はいくつもかいているよ。これが傑作なら、たくさんの傑作をかいたことになる。

この人は遠地の墓についてもおかしなことを平気でかいていて、どうもちよつと正気かねという感じだ。

A 小平靈園にある遠地の墓へ行ってみたら、それがあまりにもわびしいものだったんで、泣けてきたというんだろう？ そしていつか「党員詩人」にふさわしい詩碑をたてようと思つたというんだからふるっている。もちろんそんな詩碑をたてたなんて話はその後もないだろうがね。それにしても遠地の墓はそんなにわびしいものなの？

B さあ、知らないね、行ったこともないし、興味もない。奈良の発想にまきこまれないようにして、本題に入ろう。

それで「けぶる」のことになるんだが、奈良の意見はとるにたらないにしても、こういう政治屋さんたちを狂喜させる要素を遠地の「けぶる」がもつていたことを問題じゃないか。壺井繁治などもこの詩について、「党と自分との関係を、このように内面から歌い、詩的に高く結晶させた詩は数少ないといえる

し、最後の二行は含蓄深く、確固不動にわたしの前に立っている。彼の肉体は死滅したが、彼の若々しい精神はこの詩の中で燃え、けぶっている」(「遠地輝武小論」——新日本詩人社「遠地輝武研究」所収)と手ばなしなんだからね。

しかし実際、この詩になががあるのかね。長年、共産党員としてやってきて、それが情性となってしまった感じはよく出ている。けれども政治との関係に新鮮さがなくなっているのと同じに、対象への目もいさかかぶいんじゃないか。「春がきて黒い土塊が顔をだし」なんていうのも表現がゆるんでるね。そして遠地の姿勢は「いいにしろ悪いにしろ」によくあらわれているんだ。ここには現実との緊張関係はない。現状をあいまいなままに認めて、そこでただよっているおもむきだ。壺井のような評価がどこから出てくるのか、どうも強引すぎやしないか。

A 奈良や壺井の気持を推量すれば、遠地はもう共産党からすっかり離れてしまったように見えていたのに、じつは本心はそうではなかったんだという喜びみたいなものがこみあげて、この詩にたいするかれらなりの過大評価が生じたんじゃないかな。

ぼくは別の意味で、この詩を見て意外だったんだな。つまり「新日本詩人」——もちろん同人誌になった第二次の方が、これに出る遠地の文章から見ると、考え方のうえでは共産党とずい分の距離ができたように見えていた。そこではかなりはげしい政治主義批判を展開しているんだ、この詩を見たとき、どういうことだろうかと思った。

ぼくにはこの詩はもちろん遠地の傑作ではなく、そしてまた遠地が最晩年に到達した地点とも思えないんだがね。政治秀才からは離れてきて、しかしそこから完全に切れたわけでもなく、長年、身をおいてきた場所でもあるので、ついこういうことばがこぼれてしまったんじゃないか。ここにはすでにいないんだけど、十分にぬけだしてはいなかったために偶然に生まれてしまった詩といったらいいか。

B たしかに晩年の遠地は、会えばいつも共産党の悪口をいっている感じだったね。だけどこの詩を、遠地の本質に根ざしていない詩と君が見るとすれば、それには賛成できないな。そのことを論議してみよう。

2

A 第二次の「新日本詩人」は五八年に1号を出して、六六年、20号で終刊になっているわけだが、とくに後半は政治主義批判がはげしかったね。そして遠地はその中心になった一人といえるんじゃないか。

たとえば16号では、「詩人会議」などの詩について、こんなふうにかいている。「かれらは何かというと、詩は誰のためにかくかと叫び、自己を棚上げにして人民大衆への奉仕をよびかけ、恰も文学の革命と現実の変革とがおなじ日にも達成されるような錯覚をまねきつつ性急な政治的綱領主義、スローガン主義をふりまわすようわたしにはみえる。が、わたしは無学だから多くのことは知らないけれども、歴史をふりかえって、現実の変革と文学芸術革命がおなじ日に達成されたというためしはないような気がしている」。かなりはつきりものをいっていて、しかも正確じゃないか。もうひとつ例をあげれば、19号では「戦後の文学的建て直しに際して、何をかいてもながい戦争の荒廃と、敗戦に虚脱した国土と民生の建て直しがともなわねば文学の建て直しなどあり得ないと考えたからこそ、日本共産党にも加わり粉身努力したつもりだ

ったが、それをこんちからふりかえって果して何がよかつたとも無意味だったとも十分判断がつきかねるのである」ともいっているね。共産党へのかんりの失望じゃないか。これらを当時の遠地の基本的な考え方だとすると、どうも「けぶる」がびったり結びついてこないんだがね。きわめて共産党的な政治詩人だった遠地が、少なくとも理論ではここまで変わってきてしまっているのにな。

B 変化を認めないというんじゃない。戦後にかぎっても、遠地が詩についての考え方を変えてきていることはたしかだよ。でもそのことと、深いところでどのくらい変化したか、そしてそれをもっとも敏感にうつしだすだろう詩においてどうあらわれているかということは別の問題だと思うよ。そういう深層では、遠地は案外、変わっていないというのがぼくの意見なんで、そこが君とちがうようだ。だからぼくににとっては「けぶる」は別に意外な感じはなかったね。

ただもちろん、いま君が引用したような部分と、第一次「新日本詩人」のころの遠地の論調とではずい分の距離があるね。これは無視できるようなもんじゃないことは認めているんだよ。

A 第一次「新日本詩人」のころの遠地は、徹底した政治第一主義だね。一九五〇年の「新日本詩人」4号では、遠地は「詩の政治への関連をめぐって」というのをかいているが、あれなんかその典型だ。遠地の基本認識は、「日本の民主的詩人は今日少しへたばり気味である。詩人たちは現実への展望を失って政治への不信におちいり、内省的な自己凝視と安易な身辺雑事をうたう個人主義的な非政治主義の傾向をあらわしている」というものなんだ。そういう立場から、岡本潤の批判にこたえて意見を出しているんだけど、そのなかにはつぎのようなことばも見える。「私は民主的詩運動全体が革命的なたたかひの文学運動にほかならないとする点では、われわれの詩の仕事における「党派性の確立」ということを何よりも重視するし、又、とりわけわれわれの詩人たちにこうしたたかひへの意識がないかぎり、わざわざ民主的詩運動などと居直ったよび方をする必要もないとさえ考えるのである」というんだよ。ちよつとすごいほどだね。プロレタリア詩運動へのほんとうの反省がないんだ。

そしてこういう考え方を詩人としての遠地は実作で示してみせた。スターリン生誕七十

才記念にあの悪評高い詩「人民の鼻」をかいているのが「新日本詩人」3号だね。この詩は型にはまった表現をつぎつぎにくりにりながら、これ以上ないほど公式的にスターリン万才をのべているだけの詩で、さすがに次号ですぐ吉塚勤治の否定的な評価が出ているがね。

こうした遠地の考え方と、さつき引用した第二次「新日本詩人」でのそれとは、ちよつとどこころではない開きがあるとぼくはおもうんだよ。

B そう、それはそうだ。戦後民主主義の高揚期にいささか浮かれていた遠地にとって、その後の現実の進み具合は、社会的にいって、そして遠地自身の状況からいっても、きびしいものだったわけだ。そのなかで遠地もたしかに変わってきてはいる。ただ問題はそれの変り方なんだね。

A 君は遠地が変わってきたのは、部分的というか、表面的というか、そんなふうにとっているようだが、評論だけではなく、詩でもずい分の変化じゃなからうか。

そのへんを具体的に見てみたいんだが、戦後の遠地にはまずいまあげた「人民の鼻」的な、すさまじい政治主義詩の時代があつたね。

しかしこれは長続きしていない。やがて大きな変化を示しはじめるんだね。詩集でいえば「挿木と雲」だ。この詩集のあとがきでこういっている。「作品は主として病人くさいものをあつめた。古めかしい抒情あり、回想あり、一種無常諦観のたうちなどあつて、はなはだ感傷的でもある。そういうものをザクザク吐きだすつもりでうたつた」。たしかにこの詩集あたりからは政治詩がかげをひそめて、無常詩の登場となつていく。これが同じ詩人の詩かとおもうほど古風な詩がならんでいくね。個々の詩では現実的なものもあるが、方向としてはすっかり日本回帰といったところだね。

B そう、このあたりの詩をはじめて見たときは、これが遠地輝武の詩かとびっくりしたよ。

A それで、もしもこの段階で遠地の詩がわかってしまったら、その意味はかなり小さなものになつていただろうが、ここからまた遠地の詩は変わつていつてるとおもうんだね。詩集でいえば「癌」あたりからということになるんだが、遠地自身の結核、そして奥さんである木村好子の癌という、まったく追いつめられた状態のなかで、遠地の逆襲が始まる

んだ。戦後にかぎつていえば、第一期の政治詩、第二期の無常詩にたいして、そうだね、第三期の生活詩といつたらいいだろうか。生活についてのたんなる感想ではなく、しかしやはり生活はふまえて、そこからかなり自在におもいをのべていく詩といつたらいいだろうか。これはもうかつての政治詩とはずいぶんちがったものだし、こういうところに出てきたことで、遠地の詩人としての仕事はそれなりに重いものになつたといえるんじゃないか。

B 遠地の詩で評価するものといえ、よくも君のいう戦後第三期の詩ということになるね。つまり二つの詩集、「癌」と「千光前25番地」だ。生活詩という呼び方もまあいいだろう。けれどもその詩的意味ということでは、かなり限界のあるものとおもうし、その点が君の意見と食いちがつているようだね。

A この時期の遠地の詩は、病気にとりつかれた状況に正面から対して、ときにはあいかわらず嘆きの調子に流れることがあるにしても、とにかく居直つたところで向かつていく構えだ。鬼気迫るような詩もあつて、遠地の詩の頂点をなしているとおもうんだね。「癌」からさいごの詩集「千光前25番地」、とくにあとの方の詩集に、遠地のすべての詩のなか

で、いちばんいい部分があられていくね。たとえば「吐血の日に」といつた詩だ。ひとり居での吐血という追いつめられた事態をとりあげ、そこで自分のなかのぎりぎりの生を見つめているところに力を感じる。それから自宅附近の風景と人をうたつた詩にもなかなかの味わいがあるのがあるよ。

もちろん「挿木と雲」いらいの無常感もなわけじゃないし、政治詩の名残りもあつたりして、この詩集も単純にわりきることはできないけれども、老年ひとり暮らしを見つめ、それをただ悲しみの抒情でぬりこめるのではなく、ある現実感を生みだしているところに、この詩集のよさがあるとおもうんだね。

こういうなかに「けふる」はあるんだ、いささか本流とは離れた場所にね。むろん傑作詩だなんていうのは、見当はずれの見方だよ。**B** 詩集としては「千光前25番地」がいちばんいいね。戦後しばらくのスローガン詩などくらべると、遠地がかなり進んできたことはたしかだ。でもどうだろうか、それはそういう比較のことであつて、大きくはやはり制約のうちにあるんじゃないか。

「吐血の日に」あたりは遠地の詩の到達点を示すものだとおもうし、ほかにたとえばチン

ドン屋夫婦をとりあげた「千光前風景5」などにもさりげないまきを見ることができると。その点では「けふる」ができていいものではないことはたしかだが、しかし本質的なことをいえば、これら全体を含めて、やはり限界があることは、はっきりとらえておかなければならないんじゃないか。

3

A とところで君のいう制約とか、限界とかについて、もうすこし説明してもらおうか。

B 二つの面があるんだね。一つは遠地の思想と感性といつたらいいかな。ぼくらがさつき見たように、たとえば対共産党といつたことでは、大分変わってきたことは否定しようがないだろう。遠地をとりまく状況がそうさせていったのだが、しかしそれは遠地のどこまで及んだのだろうかということだ。会えばよくぶつぶつと、政治にしても文学にしても不平をもらす人だったし、政治主義批判ということではよくと大いに意見が合ったんだが、しかし文学と詩の自律性をどこまで自分のものにしてたのだったろうか。変わってきたのは意識の表層だけで、深層ではいぜんとして政治に引っぱられていたんじゃないやなだろうか。

このことは主体が確立していないというふうにいっていいだろうね。

それからもう一つは、このことと関連して、どうも遠地は詩の方法についての意識が弱かつたようにおもうんだね。例をあげれば、さつき君が引用した「挿木と雲」のあとがきだけだね、あのおとこういつていっているんだね、

「一九二〇年代のダダイズム詩人として出発した私は、大正期の旧抒情詩の破壊から一足とびにプロレタリア詩運動へすすみ、ほとんど自己内面の古めかしさをさけて通る感があつたが、しかしそれでは必ずしも古い抒情を克服する所以ではないし、また抒情は作品を通じてでなければ克服する機会がないと考えたからである」。つまりプロレタリア詩のときに自分の古さをさけたので、こんどはそれをいっばいに吐きだそうというんだが、この考えはちよつとおかしいとおもわれないかな。自分のなかの古さを自覚したのはいいよ。だけどそれをただ吐きだすのは、「古い抒情を克服する所以」だろうか。そうじゃないだろう。これじゃいつまでたつても克服できないんじゃないか。プロレタリア代表みたいな叫びをあげている詩と古きいっばいの無常詩とは、両方とも自分を甘やかしている点で共通

性があるんだとおもうね。ともに現実とのかかわりがなく、かかわりから生じる痛みがない。

遠地が意識の表層ではともかく、深層ではなお政治に引きづられて主体を形成していないこと、そしてその詩に方法を確立していないこと——この二つがむろんかたかく結びついているか、一つの二つの側面として、遠地のなかにあつたんじゃないかとおもうんだ。

A 君のいうことはわかつた。で、第一の思想と感性というのか、その点ではぼくは第二次「新日本詩人」にあらわれたかぎり、ずいぶん変わってきたという印象をもつていて、「けふる」でむしろ、あれつとおもつたんだけど、君は変わらない方にウェイトをおいて見ているんだな。

B そういうことだね。ぼくにしたら遠地と話をしているかぎりでは政治主義に全面的に反対しているようにおもつたこともあるが、かいたものをこんどよみなおしてみると、遠地が政治にとりこまれていたそのとりこまれ方はずいぶん根深いものだったようだね。政治主義批判をいろいろやつてもいるが、すぐそのつぎに政治の優位性を認めたりもしている。

大分ゆれもしたし、調子も変わってきいてはいるにしても、根本のところではどうかね、そう動いてはいないんじゃないか。「けふる」

は遠地にとって、自然な詩だったとおもうんだけどね。

A それほどの強さで、政治は遠地にしみとおっていたのかな。そうだとすれば、その根源はどこにあるのだろうか。

B もちろんいろんな要因がからみあっていにはちがいないね。だからこれは一つの推定にすぎないが、遠地の過去を考えてみると、ある流れが浮かんでくるような気がするんだね。

遠地には完成した自伝はないが、第二次『新日本詩人』の18号から20号まで、3回にわたって、幼少時代からダダイズム前夜にいたるまでの自伝を連載している。遠地の死によって、雑誌とともに自伝は中絶してしまっただけで、遠地について考える手がかりは提供しているとおもうね。明治時代の農村の、そう豊かではないにしても生活に困るようなことはない地主の家に生まれて、明治のおわりから大正にかけての空気を吸いながら青年期を迎えていってね。そういう階層的、時代的背景から見ると、なんとなく浮かんでくる遠

地のイメージがあるんだ。

中学時代の思い出として、夕涼みで長兄、次兄そして遠地の三人が立志を語りあい、長兄は画家、次兄は学者、遠地は文学者でそれぞれ身を立ようということだったそうで、そのときの頭上の星の輝きが強く印象に残ったそうだ。頭のいい少年として、この世でなにごとかをなさねばならないし、またそれが

できるという自負のなかで育っていったんじゃないか。大きな未来を目的にしている、遠地はぐんぐん走ることを考えていたんだらう。ところが一方では、もうさまざまな挫折がはじまっていた。小学生のときには下らない新任教師のボイコットにまきこまれて級長をやめさせられたり、中学に入れば入ったで体操教師と衝突したりして落第というありさまだった。どうにも順調とはいいたくないんだね。立身出世コースからはどどんずれていってしまう。

A 自伝はぼくもよんだが、なかなか反抗的な子どもではあつたらしいね。末子のわがままもあつたかもしれないけど、自分の意志を押しとおしていく姿勢は、やはり文学とつながるものなんだろうね。

B それはそうおもうね。もって生まれた反

抗精神には自伝のなかでよくお目にかかるね。反抗せざるをえないものが、生活のなかにごろごろしていたわけだね。そしていまいった一方での野心。そんなこきまざりのなかに遠地の少年時代はあつたんだらう。

そして遠地の気持をいっそう屈折したものにしたのが次兄の存在だったんじゃないか。三高から東大へとまっすぐに進んでいく次兄のかけは遠地のコースに色こくおちていく。中学じゃ、あだ名までその次兄の名まえをもらうありさまだったんだからね。体制のなかでぐんぐん伸びていく次兄と、次兄にくらべて能力が劣っているとおもえない自分が、実際問題としては距離があいていくようにおもわれるところからくるあせり。しかも遠地だって、体制に反抗しつつもまたひかれるものも感じていたんだらう。そんなもやもやは大きくなるばかりだったんじゃないか。

A 中学を落第した遠地は、絵の方に進むことになって上京するんだね。そして写生にうちこんだりする時期もあるんだけど、生活苦からやめちゃってるね。

B そうだね、東京でもまた挫折したことになる。体制にはますます反感をもつたんだらうな。そんななかで詩が発するわけで、ご

く初期のダダイズムの詩は「夢と白骨との接吻」におさめられているんだが、ここにはそういう反抗精神をよみとることはできるだろう。だからその反抗をなすりかまわず深めていけばよかつたんだけど、題名のわりには詩はおとなしいね。反抗不足なんだよ。

A それはぼくも感じた。ちんまりした詩が多いね。本格的な反抗というより、世に入られないことをこぼしているようだね。反抗がムードにおわって、いっこうすご味が出てこないんだ。

B そしてそういった詩をダダイズムと名づけたら、ダダイズム風に仕上げるところに遠地の問題があるということをはいてはいいわけなんだよ。ほとぼしるような反抗精神を対象にたたきつけるというふうなんじゃないかと、なにか世に流行しているもの、流行しかかっているものに目が向くところがあるんじゃないかね。それがさつきいったこの世で名をあげたい気持ちにつながっているんじゃないか。美術では目的をはたすことができなかった、こんどは文学でということになると、対世間的な配慮をすることになってしまう。遠地がダダイズムにいく内的必然性はちよつと乏しかったんじゃないか。反抗精神からし

て、ダダイズムに近親感をもつたのはわからないんじゃないけどね。とにかくダダイズムをもつてきて、なんかそれらしく器用にこなしてしまつたようで、そういう才能は遠地にあつたわけだが、どうもそれは遠地にマイナスの作用をしているようだね。

このような詩的出発のときのパターンが、その後もくりかえされているようにおもうんだがどうだろう。内的必然性は弱いんだから、ダダイズムだつてそう長くこたわっていることはない。つぎのものにのりかえちゃうんだね。

4

A ダダイズムはたしかに遠地の表面をとおすりすぎていった感じだね。そのあとにはもちろんプロレタリア詩はあるんだけれども、ほかの流れの影響も受けているんだらうか。

B プロレタリア詩のまえに民衆詩派があるとおもうね。遠地の二番目の詩集「人間病患者」には民衆詩派的手法の詩がみられるんだ。「太陽は俺たちの心臓の色だ」という詩などだね。「鐘が鳴る 鐘が鳴る」とはじまつて、「新しい生活のはじめの鐘が鳴る」とうたいあげるんだが、「希望」とか、「歓喜」

とか、「驚異」とか、概念語をちりばめて、中味は乏しいんだな。大正期には民衆詩派は大活躍の時期があるんだが、それをさつそくとりいれているおもむきだ。

そして、この「人間病患者」には、すでにプロレタリア詩も出ているね。「父の病氣」なんてそうじゃないかな。製鉄工場で働く娘になりかわって、生活の苦しさや父の病氣をうたつていて、プロレタリア詩によくあるタイプのものなんだ。めまぐるしいほどの変化なんだね。遠地はなぜこう急いだんだらうという気がする。

A 現状をなんとかしたいというあせりがあつて、一つのものをつくりつきつめていくかわりに、新しいものをつぎつぎと引き入れていくんだね。時流にどうも鋭敏すぎるわけだ。こうなればもうプロレタリア詩まで是一直線だね。当時、もっとも新しい文学潮流としてひろまろうとしていたんだからね。

B そういうことだね。息せききつて、遠地はプロレタリア詩までつ走ってしまった。そして重要な点はこのプロレタリア詩は、それまでのダダイズム詩や民衆詩とはちがうウエイトで、遠地のなかにどっかり腰をすえたということだらうね。つまりプロレタリア詩

はもちろんその思想の面で体制とはあいいれないものをもつていた。そのことは遠地の反抗精神とびつたりきたんだとおもう。しかもこの思想は近い将来に世の中を主導するんだという強い主張をもっている。権力志向だね。これもまたこの世でなにごとかをなしたい遠地の気持に合ったんだろう。これだというんで遠地はそっちへ動いていった。そしてそこに安住の地をえてしまったということじゃないかね。

A プロレタリア詩人会書記長なんていうのになつちやうわけだね。さっきの『掃木と雲』のあとがきどおり、自分の内面は不問にして、いさましい方向へ進んでしまったんだ。もつともそのころはそんな意識なんかなくて、むしろようやく自分の道を見つけたようにおもっていったんだらうが。

B 遠地の反抗心と変形した立身願望の両方を満足させるものは、プロレタリア詩以外には考えられなかったんだね。だからそれ以後の遠地はずっとプロレタリア政治詩人なんだよ。むしろそれがはげしく表へ出た戦後しばらくの時期があるとおもえば、『挿木と雲』のように無常感あふれる詩になつたりしたんだけれども、後の場合だつて遠地の深層はさ

して影響を受けていなかったんじゃないか。思想は思想として遠地のなかにどっかりとあり、それとは一応別のところで古い歌をうたつてみたにすぎないといえないだらうか。

それがいささかぐらつくのは、君のいう生活詩——『癌』以後ということになるんだらう。しかしぐらつきほどまでいったのか。遠地の表層どまりじゃなからうか。はじめに引用した「けふる」に、「いいにしろ悪いにしろ」ということばがあったわけだが、こ

うところまで遠地が後退したにしても、それ以上に、深層をつきすすまではないかかたつた。思想の根のはりようはどうしりして、ちよつとやそつとではどうしようもない。生やさしいものではなかったということだ。

A しかしこういうことはないのかな。遠地の思想が長い時間をかけて強固に形成されたもので、なかなか変化しようもなかったとして、詩がそれから独立して動くことはないのだらうか。思想と詩がいつも一致しているとはいえないとおもうんだ。

B 政治からの詩の独立といったことはあるだらうとおもうね。ただそれは条件があるんだ。つまり詩がさつきいったように、方法をもつていなければならぬということなん

だ。それだけが詩に独自性を保証することになるとおもうんだけど。まあ詩と政治がうまいバランスをとって進むことがないとはいえないのかもしれないけれど、むしろ普通は対立をはらみながら共存しているんだらう。そのとき詩に方法がないとのみこまれてしまふんだね。ところがこの方法は主体なしには生まれぬ。主体は政治に全面的に支配されては生まれぬという関係なんだな。

A 君がいいたいのは、遠地の詩には方法がなかったということだね。

B 少なくとも方法意識は乏しかったといえるね。第一訃集の『夢と白骨との接吻』からして、いささか場あたりのダダイズムだったわけだが、そこには反体制的な気分は色こく反映していたんだね。だから遠地にとつて必要なのは、そういう自分を見つめ、自分におそいかかってくる現実の暗さをしっかりとつきとめることだったんだらう。それをもつとも効果的に行なうにはどうするか、そういう試みのくりかえしによつてだけ、方法というものもできてくるんじゃないか。ところが実際は民衆詩派に目をやったり、あるいはプロレタリア詩に寄つていったり、自分ではなく、外ばかり見ているようなんだね。これでは方

法はできてこないし、政治に流されてしまふよ。

A そういう詩をかけたあとに、さつきいったように無常詩があつて、これは政治からは自由で、自分のなかの古さを出していつているんだが、ここにも方法は乏しいということになるね。

B 残念ながらこれは方法——少なくともぼくらが課題としているような方法ではないだらうね。現実を深いところでえぐりだすことこそが意味があるんだらうからね。方法というのにはなにかといえ、主体が把握した現実を表現する個有のやり方とでもなるのかな。それが成立するためには、現実をたちむかう主体のはげしい意欲があるし、さらに最終的にはことばとして定着しなければならぬのだから、それなりの持続した詩的追求が欠かれないということだらうね。

A そういう主体がなければ方法は成立しないとするれば、政治第一主義に深層を支配されている以上は、しっかりとした主体もありえずしたがってまた方法もありえないということに、君の意見ではなつてくるね。そうするとそういう意味での、思想と詩の一致論ということになるのかな。

B 基本的にはそういうんじゃないか。ただ実際のところ、同じように政治的であつたにしても、そこに個人の思考の自由があるかないかといったようなことはあるにちがいない。あるいはまた詩人によつて、方法に関心をもつ場合とそうでない場合もあるんじゃないか。方法に関心をもつたとしても、主体が確立していない以上はそういうものができはしないだらうが、方法意識をもつことが逆に主体確立へのきっかけになるといったことはありうるとおもふね。

ともかく遠地の場合は、政治が詩のうえで少しのプラスもたらしはしなかつたんだね。晩年の遠地のなかで政治はいささか後退していったし、その後退は意識の表層ではいぢるしいものがあつたわけだ。そのとき主体と方法への思考は目ざめていったのかもしれない。そんなものを感じさせる詩もあるね。けれどもあんまり長いあいだ政治主導の詩をかきつづけてそれが身につくまで、政治が後退したときも別の質を生みだすことができなかつた。政治がしみていて、新しい探求へと気が動いていかなかつたんだらう。

主体をもち、方法を確立した詩人は、政治のなかにあつてもなおかつそれに支配される

ことなく、詩的現実を生みだすことができるんだけど、遠地では政治的制約がそのまま詩の制約にもなつちやつてくる。政治以上を期待できないわけだね。さいごの詩集『千光前25番地』の詩はたしかに硬直した政治がぐんと少なくなつてはいるだけ、のびやかになつてはいるし、周囲を見つめる遠地の目の成熟もあつて、長い詩の歩みのなかで、もっとも魅力のある時期となつてはいるね。だがそれから先へは出ていないんだな。

A ところで方法をもたない詩は、すなわちよくない詩ということになるのかね、プロレタリア詩にかぎつてのはなしでもないのだが。**B** かならずしもそうだといえないだろうね。骨の髄まで政治的であつたにしても、それが個人の強烈な生活感情にささえられている場合は、方法意識がなくても、力のある詩が生まれているようだね。これはプロレタリア詩の、作者が労働者だともわれる詩のある部分に感じることなんだ。ただここにも問題はあつた。つまり長続きしないということなんだよ。わずかの詩をかいて、すぐに消えちゃう。これは弾圧がはげしかったなんてことだけで説明できることではないとおもふよ。詩の持続には、労働者出の詩人にもやつぱり方

住居跡

山野チエ

冬の富士山は美しいだろうなと

思いながら

一枚の設計図を眺めている。

富士がよく見えるようにと

それだけを考えて

やっと出来上ったと思ったら

とりやめになってしまった図面であ

る。

初めに

完成した家の姿が浮かんでくる。

それがだんだん薄れたと思うと

今度は住居跡のようなものになって

来た。

それも

子供の頃

川原の砂の上に

小石を並べて描いた設計図のような

のだ。

あの頃

川へ泳ぎに行っては

泳ぎ疲れると

思い思いの家を描いて

お互いの家を訪問し合ったりした。

あの川原には

いったい いくつの家を描いたこと

に

なるのだろうか。

そして

今は記憶の中だけにある

川原の住居跡と同じように

この設計図も

紙の中に閉込められたまま

外に出ることはないのだろうか。

法が欠かせないということになるんだろうね。

遠地は反抗精神はもっていただけでも、も

ちろんそういう労働者のな生活感情にささえ

られていたわけではなかった。いい詩をかく

には主体を自分のなかに築きあげながら、方

法という知的操作をもって現実にはちむかわ

なければならなかったんだね。ところが実際

は、政治崇拜ががっしりと根を生やしている

んだから、詩の方法をいったところで、道

はかわらなかつたことになるな。すでに

意識の表層はあれだけゆらいでいたんだから

それがさらに深層へも及んだら……という空想

はできるけれども、人間、そうかんたんには

いかないだろうね。

A 遠地は多彩な才能をもった人だったんだ

けど。『現代日本詩史』をまとめあげるエ

ネルギーだって、たいへんなものだったろう

とおもうよ。にもかかわらず、ぼくらとして

は批判もまたあるというわけだ。

B 才能もあつたし、とくに晩年は人間味が

ゆたかだったね。幅もあつたよ。そうでなけ

れば、あの結核菌がいそうな、ほこりっぽい

千光前に、ぼくらが入りするはずもなかつ

たろうしね。世話にもなつたよ。それでも、

ことが文学である以上は、はつきり物をいっ

ておかなければならないんだね。

「けふる」なんていう詩はそういう弱さの

あつた遠地の生地をくつきりあらわしている

んだとおもうよ、その根本的な抜きがたさ、

そして「いいにしろ悪にしろ」的なあいまい

さも含めてね。

編集後記

新参加の同人諸君に

コスモスは大分年をとった。目下の同人は
大体いつも三十人。文運隆々たる他誌に比較
すれば何故かさびしい、と私を攻める人たち
がいるが、私はそうは思わない。創刊から約
三十数年、どうやら百号に近づいている。長
いことではひげはとらない。近寄って実物の
顔を見て下さい、というところである。とつ
ぜんこんなことを言い出してもおかしく思う
ことはない。近頃同人加入の申込者急増の意
味は語りにくい、ある一個の趨勢が、詩を
書くなら「コスモス」を思い出せ、といって
るのかもしれない。このグループには取柄と
いうものはないと自負している。しかしそん
ならとうに消滅していそうな筈だと皆の気
焰であるが、私もまたそういうものだろうと
考えはじめています。自由主義を奥の奥まで追
及しようという気がまへの、そのもう一つに

手づかみにしようとしている、そのことをこ
こにひろく知らせようとする者である。
吾人はそれぞれに生きている。自由勝手であ
る。詩を道徳や政治や、見せ物やの世界か
ら逃亡させてみようとするのだ。
許されるべきものは、自分が他の同志同人
を許容せざるという、生き方立ち方、今日こ
こにこのような叫びを挙げていることに、「コ
スモス」集団が同調せずして、ボクの主張を
踏みつ、叩きこわすに至ろうとも、今日奥の
方に、何故ともいえず不思議がひそんでいる。
平たい言葉で表現するならば、老人の多いこ
の集団では、若手白面の詩人が、「コスモス」
の歴史などを踏み台にして、一九八〇年代
のハレー彗星時代をめぐって、老若入乱れて
の、自我主張をもう一度踏みつけようと、参
加しつつあることだ。先輩を先輩と思わず、
詩をふんずけることを詩の活動の当然の運命
として、主張として、集まり、叫ぼうといっ
はるかな機運を、まさに現在、それは許され
ている。
今われらどもの保持するのは、新しくなど
は決してないこの程度の考え方に過ぎない。
これをも新しい活動と思うな。このような暴
発的思考は、常にわれらを支えている。(秋山)

コスモス 第41号 (通巻80号)

〈定価五〇〇円〉

発行 一九八三年六月一日

編集人 秋山 清

発行所 東京都中野区上鷺宮五二一八八

印刷 (資) オカダ印刷

電話 (03) 九九八一二九二五

印刷 (資) オカダ印刷

名古屋昭和区長戸町四一〇